

小田原文学館特別展

没後10年記念

藤田湘子

と

近代俳句



平成27年3月21日(土)~5月10日(日)

いあいらじ

俳句は和歌・連歌・俳諧の流れを受け継ぎながら近代文学のひとつとして正岡子規ら新派俳人によって明治後期に確立した。いわば「古くて新しい」分野です。

正岡子規の流れを汲み、継承しながらも新たな境地を切り開いた俳人たちは数多くいます。その一人、小田原出身の俳人・藤田湘子は、戦時中に俳句を志し、水原秋櫻子の「馬酔木」に参加してから平成17年に亡くなるまで、句作、指導、社会への紹介を活発に行っています。

俳句を初めて手がけて以来、「馬酔木」での活動から、俳句結社「鷹」発足、韻文性の回復、多作の試行、集団が手がける座の文学の復権と、常に俳句の課題と意欲的に取り組み続けた湘子の意志。それは、過去を踏まえ、しかし過去にとどまらず新たな境地に挑んだ精神を、和歌の美を極限まで磨き上げた藤原定家、俳諧の大きな流れを打ち立てた松尾芭蕉、明治以降、新時代の俳句を繁栄させた正岡子規や高浜虚子たち、湘子が俳句を学んだ水原秋櫻子、句作において影響を受けた石田波郷といった大勢の先人から継承したものであると位置づけられるでしょう。

湘子没後10年を迎えた今年、藤田かをり様・鷹俳句会会員の皆様のご協力を頂いて、小田原文学館で展覧会を開催する運びとなりました。この春、ぜひ当特別展をご覧いただき、文学の一分野における伝統と変革のつねりを味わっていただけたらと思っています。

平成27年3月

小田原文学館

凡例

1. この小冊子は、2015（平成27）年3月21日（土）～5月10日（日）を会期として小田原文学館で開催する同名展示の解説書です。
2. 本冊子の編集及び執筆は小田原市立図書館学芸員 鳥居紗也子、白政晶子が行いました。
3. 引用の際に新字体に改めた箇所があるとともに、ルビ、傍点、敬称等は適宜省略しました。
4. 雑誌「ほととぎす」、「ホトトギス」の表記については、本展示では「ホトトギス」と統一しました。
5. 資料の所蔵先の記載のないものは、小田原市立図書館の所蔵品です。
6. 今日の社会通念に照らして不適切と思われる表現は、原文を尊重しそのままとしました。
7. 展示内容と本冊子の掲載内容・資料番号等は異なる場合があります。

資料解説

第1章 近代俳句を支えた人々

明治20年代半ばから、正岡子規による俳句の革新運動が始まりました。当時、すでに小説で提唱されていた**写実主義**によって、**俳句でも近代的な表現が誕生**しました。子規は『**獺祭書屋俳話**』、『**俳諧大要**』で旧派の俳句を否定、新しい俳句のあるべき姿を明らかにしました。このように、**俳諧を俳句として近代芸術に高める論を展開した子規のもとには、高浜虚子や河東碧梧桐らが集まり、彼らの発表の舞台となった雑誌「ホトトギス」は、俳壇の中心的存在となっていきました。**

子規の没後、虚子と碧梧桐は句風の違ひから対立。碧梧桐は子規の写実をさらに深め、虚子は一時期俳句から遠ざかりましたが、碧梧桐らの唱える**新傾向俳句に反発し、俳壇に復帰**します。さらに「ホトトギス」は、水原秋櫻子、山口誓子ら「四S」を輩出しますが、やがて彼らは他の雑誌を創刊して**独立、新興俳句運動を主導**していくことになります。

1・獺祭書屋主人（正岡子規）

『**獺祭書屋俳話**』 日本新聞社、1893（明治26）年
個人蔵（複製）

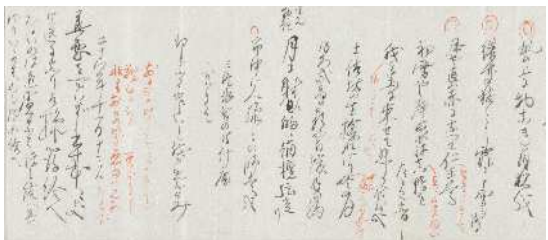
明治25年に新聞「日本」に掲載された俳論をまとめたもので、正岡子規の俳句革新の第一歩とされる。子規は、従来のマンネリ化した俳諧を「月並調」として激しく攻撃した。病気のため布団の周囲に書物を並べている自分の姿を、捕らえた魚を並べているさまが祭りに例えられる「獺（かわつそ）」になぞらえたことから、この題名がつけられた。

2・夏目漱石「正岡子規へ送りたる句稿六」1895（明治28）年11月13日

神奈川近代文学館（複製）

子規と夏目漱石は、第一高等中学校在学中に同級生として出会い、互いに落語好きという共通点もあり親しくなった。漱石は明治28年4月、子規が日清戦争の従軍記者として日本を出発する直前に、英語教師として松山中学に赴任している。その後、帰国の船上で嗜血した子規が松山に戻ってからは、漱石は子規を中心とした句会に加わって熱心に句作を行っている。子規が松山を離れた後も、漱石はしばしば書簡に自作の句を書き連ね、子規に添削を乞うている。

この書簡の末尾には「善悪を問はず出来た丈送るなり左様心得給へわるいは遠慮なく評し給へ其代りいゝのは少しほめ給へ」とあり、これに対し子規は「前日のに比してうまきこと数等なり悪句なきに非ざるも前日の如き悪句は見あたらす」と評した。



2



1

四S

昭和3年秋、山口青邨が講演「どこか実のある話」の中で、当時「ホトトギス」派として活躍していた水原秋櫻子、高野素十、阿波野青畝、山口誓子の4人のイニシャルが偶然Sであったため、「東に秋素、西に青誓の二Sあり」と語ったことから名づけられた呼称。もとは「しいエス」と言われたが、近年は「よんエス」と呼ばれることが多い。

3 正岡子規『子規俳句経覧』天竜堂、1926（大正14）年

子規が俳句仲間26人を野菜や果物に例えたもの。河東碧梧桐は「つくねいも」、高浜虚子は「さつまいも」に例えられている。

4 「ホトトギス」2巻6号、1899（明治32）年3月

個人蔵

明治30年に松山で創刊された雑誌。はじめ柳原極堂やなぎはらのきょくどうが発行人だったが、20号で松山での発行は終わり、明治31年10月号を2巻1号として虚子に引き継がれ、東京で発行された。子規らは「ホトトギス」を舞台に「写生文」を実践、漱石の「吾輩は猫である」(明治38年)も写生文としてこの雑誌に発表された。

5 正岡子規「をどとひのへちまの水も取らざりき／糸瓜咲て痰のつまりし仏かな／痰一斗糸瓜の水も間にあはず」1902（明治35）年9月18日

神奈川近代文学館（複製）

子規は22歳頃に咯血し、晩年は肺結核と脊椎カリエスに侵され苦しい病床生活を送っていたが、その文学はユーモアに富んでいた。この3句は死の10数時間前に書かれたもので、子規の絶筆となった。

6 高浜虚子「春雨の衣桁に重し恋衣」(初出「めさまし草」明治29年2月)

神奈川近代文学館

明治27年の作。昭和12年に「ホトトギス」550号を記念して出版された、虚子の自選句集『五百句』(改造社)の冒頭に掲載された。

7 河東碧梧桐『現今の俳句界』を読む

「ホトトギス」7巻2号、明治36年11月

個人蔵

前号の「ホトトギス」に掲載された、虚子の「現今の俳句界」への反論として執筆された文章。これに対し虚子は、次号の「ホトトギス」で「再び現今の俳句界に就て」を発表して応酬した。

8 水原秋櫻子「筑波山縁起」年不詳

秋櫻子による連作俳句。昭和2年11月に筑波山に吟行したときに作られたもので、連作俳句の始めとされる。四季にまたがる季語が使われている。

9 「天狼」2巻11号、1949（昭和24）年3月

個人蔵

「天狼」は、戦後の昭和23年に山口誓子によって創刊された俳誌。「出発の言葉」で誓子は「現下の俳句雑誌に、『酷烈なる俳句精神』乏しく、『鬱然たる俳壇の権威』なきを難するが故に、それ等欠くところを『天狼』に備へしめよつと思ふ」と述べた。この雑誌の創刊について湘子は、『馬酔木』に身を寄

連作俳句

連作俳句は、一作だけの単作に対して、同一主題の俳句を何句か連ねて、一句では表現できない内容を連作・並列する表現形式。窪田空穂や斎藤茂吉の連作短歌からヒントを得て秋櫻子が始めたとされる。あらかじめ構成を設計する「設計図式」と、作品の配列に主眼を置く「モンタージュ式」に大きく分けられる。同じ季語が用いられる場合、単調な繰り返しになるため省略され、結果として無季俳句の容認に結びついたり、一句の独立性が弱まったりする難点があることから、秋櫻子も戦後はほとんど作っていない。



4



6

せて静観していた、『誓子が、ついに動く』こと」が「群を抜いた大事件」で、「センターシヨナル」であったと回想している。『俳句の方法』角川書店、平成6年）。

10 加藤楸邨「さえさえと雪後の天の怒涛かな」

『雪後の天』交蘭社、昭和18年

個人蔵

加藤楸邨の第四句集。昭和20年4月13日夜の空襲で、湘子は池袋の下宿を焼け出されているが、炎上する家の中に飛び込み、本棚から夢中で数冊の本をつかんだという。この時救い出したうちの一冊が楸邨の『雪後の天』であった。湘子は「忘れ得ぬ句集である」(『俳句の方法』)と述懐している。

11 石田波郷「初蝶や吾が三十の袖袂」『風切』一条書房、昭和18年

神奈川近代文学館

昭和17年の作。この句について波郷は「『三十而立』、私は自分の青春と馬酔木から袂別した。然しそんなことを詠んだ句ではない」(『波郷百句』現代俳句社、昭和22年、引用は『波郷句自解』梁塵社、平成17年による)としている。

12 川端茅舎「涅槃会に吟じて花鳥諷詠詩」

『ホトトギス』36巻8号、昭和8年5月

個人蔵

川端茅舎は、大正期に草土社を結成した岸田劉生（おうれい）について画家を志す一方、虚子に俳句を学び、後に病気がちとなったため絵画制作を断念して作句に専念し、虚子に「花鳥諷詠真骨頂漢（まごころ）」の称号を与えられた。茅舎の句「涅槃会に吟じて花鳥諷詠詩」にある「涅槃会」とは、釈迦成仏の日に諸寺で行う法会のこと、花鳥諷詠の実践によって一切を解決しようと決意している自分は、涅槃会での経文の代わりに花鳥諷詠詩（俳句）を吟ずるのだ、というような意味。

13 中村草田男『長子』沙羅書店、1936（昭和11）年

個人蔵

昭和11年刊の第一句集。草田男は初め虚子に師事し「ホトトギス」同人となつたが、後に「無思想」、「文学精神の喪失」などを指摘し「ホトトギス」を批判。一方、昭和初期の水原秋櫻子・山口誓子を中心にした新興俳句運動に対しても一線を画し、加藤楸邨や石田波郷とともに「人間探求派」と呼ばれた。

14 荻原井泉水『井泉水草画集』日賀出版社、1988（昭和63）年 復刻版

昭和48年初版の画集で、画に文や句が添えられる「俳画」と似た形式をとるが、井泉水は「俳画」と「草画」は異なるとしている。「草画」とは「草書」の「草」の心をつつしたもので、「プロフェッショナルになる以前の、アマチュア精神をもって画をかきたい。それが私の言うところの『草画』である」と述べている。また、自然リズムを主とするところが、草画と自由律俳句の共通点であるとする。



13



10



11

- 15 高浜虚子『俳句の五十年』中央公論社、1947（昭和22）年

個人蔵

出版社から俳句生活50年のことを話してみないかと持ちかけられ、「思ひ出すに従つて切れぎれの話をして」、速記した内容をまとめたもの。「子規との交友」、「子規の委嘱を辞退」など子規との関係や、「漱石との往来」、「碧梧桐との交際」など文学史上重要な人物との交流の様子も詳細に記されている。

第2章 秋櫻子とともに

藤田湘子は、本名を良久といい、大正15年1月11日、小田原町十字三丁目（現・小田原市本町）に、職人である父源太郎と、母ミネの長男として生まれました。

湘子の俳句の出発点は、昭和17年1月のある夜です。東京の下宿から帰郷した湘子が、小田原駅から実家まで歩いて帰る途中、お堀端の桜の蕾が満月に照らし出されているのを見かけました。湘子はその様子に感激しますが、その感動を表現する方法がわかりません。そこで「何か表現力を身につけよう」と決心し、「形式が短いから」という理由で俳句を始めることにします。

16 歳の湘子は、まず俳句の全容を知りたいと考え、水原秋櫻子の『現代俳句論』を購入、その俳句論に刺激を受けました。さらに秋櫻子の句集『葛飾』を読み、「秋櫻子門のひとりとして俳句を作ろう」と決意し、「馬酔木」へ入会、投句するようになります。

- 16 写真「池袋の焼跡で」1945（昭和20）年5月

個人蔵

空襲で下宿を失った湘子は、終戦直後に一度小田原に帰郷した後、池袋に戻って焼跡を彷徨した。終戦の昭和20年を振り返り、湘子は「イヤな年である。思い出したくもない年である。さまざまな衝撃があり挫折があった。暗く惨めであった」（『俳句の方法』）と述べている。

- 17 藤田湘子「初風」初風俳句会、1946（昭和21）年

発行所が湘子の小田原の住所になっており、「今度池袋から熱海の分教所の方へ移りました」との記述があることから、終戦後、「馬酔木」同人となる前の昭和21年に湘子が発行した俳句の同人誌とみられる。通巻5号（6月号）～6号（晩夏号）が合綴されている。

- 18 水原秋櫻子『葛飾 馬酔木叢書第四編』

「馬酔木」発行所、1930（昭和5）年

個人蔵（復刻）

『葛飾』について 湘子の回想

『現代俳句論』によって眼を開かれた私の気持は、もうほとんど水原秋櫻子のほうへ向き、秋櫻子を軸にして「俳句」を考えるようになっていた。だが、しかし、私はまだ秋櫻子の作品を十分に知らなかった。あれこれと散発的に眼にする二句三句はあっても、一冊の句集がない。ことに評判の高いらしい『葛飾』を見たいと思う。『葛飾』はないか。（中略）しかし、『葛飾』はどこの古書店にもなかった。（中略）
書庫から久しぶりに取り出した日新書院版『葛飾』を見ると、奥付は昭和十八年五月五日再版発行（一〇〇〇部）となっている。そうすると私は、一年近くも『葛飾』を探し求めていたことになる。（『俳句の方法』角川書店、平成6年）

昭和5年刊の秋櫻子の句集。書名『葛飾』は、「その土地（葛飾）が私にとつて懐かしいばかりでなく、多くの句を得させてくれたことを記念するため」（序文）に付けたと秋櫻子は述べている。序文で反「ホトトギス」の所信を表明し、文壇に大きな影響を与えた。作品の配列は当時の大多数の句集と同じく四季別になっているが、その中に「葛飾の春」、「多摩川の春」といった小タイトルが付けられるなど、句集の編集上の新たな試みが行われている。秋櫻子の『現代俳句論』（第一書房、昭和11年）を読んで刺激を受けた湘子が、評判の高いこの句集を買おうとしたがどこの書店でも見つからず、一年ほど後にようやく再版を手に入れたという。

19 水原秋櫻子「かつしかや桃のまかきも水田へり」

（初出「ホトトギス」29巻8号、大正15年5月）

神奈川近代文学館蔵

句集『葛飾』所収。水田の多かった葛飾を想起し、水田に囲まれた家の籬（垣根）に咲く桃が水の上に映っている美しい情景を詠んだ句。

20 「馬酔木」27巻12号、1948（昭和23）年12月

鷹俳句会蔵

湘子が同じ秋櫻子門の能村登四郎と一緒に馬酔木賞（新人賞）を受賞した句。

21 石田波郷『雨覆』七洋社、1948（昭和23）年

個人蔵

昭和23年に刊行された波郷の句集。湘子は、兄弟子である波郷から大きな影響を受け、ライバルとして意識していた。「馬酔木」新樹集の巻頭をとった湘子は、この句集を手本と決めて愛誦し、「馬酔木」同人になることを目指したという。

22 「馬酔木」28巻12号、1949（昭和24）年12月

鷹俳句会蔵

編集後記に秋櫻子の名で、「左の諸君を同人に推薦します」と掲載され、湘子が同人となった句。

23 「馬酔木」三十周年記念号、30巻4号、1951（昭和26）年4月

鷹俳句会蔵

昭和26年は「馬酔木」創刊30周年であった。この前年、波郷より「馬酔木三十周年記念号」の手伝いをしてほしいと頼まれた湘子は、「馬酔木年譜」、「巻頭句集」の原稿執筆と全体の校正を担当した。湘子は著書で、新村出、斎藤茂吉、窪田空穂、山口誓子らが名を連ねる本号の目次を紹介し、「こんな豪華な内容は波郷だからできた」（『俳句の方法』）と賞讃した。小田原出身の作家・尾崎一雄も原稿を依頼され、「身近かな眺め」という文章を執筆している。



23



21



19



18

2 4 石田波郷「尾崎一雄宛書簡」1950（昭和25）年12月26日付

神奈川近代文学館蔵

「馬酔木」の創刊30周年を翌年に控えた昭和25年12月、当時「馬酔木」の編集長を務めていた波郷が、尾崎一雄へ「馬酔木三十周年記念号」への原稿執筆を依頼した書簡。「美しい眺め わが風景論」というテーマでお願したい旨と、尾崎の「暢気眼鏡」以来ほとんどの作を読んでいる、「一ファン」であることなどが書かれている。

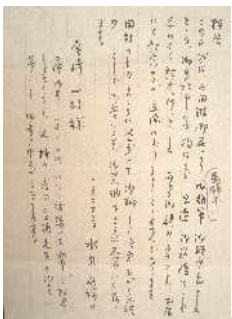


24

2 5 水原秋櫻子「尾崎一雄宛書簡」1951（昭和26）年2月24日付

神奈川近代文学館蔵

波郷の依頼に応じて尾崎が「馬酔木三十周年記念号」へ原稿を送ったことに對する秋櫻子の礼状。追伸には、共に歌作の指導を受けた窪田空穂の名前がみえる。



25

2 6 水原秋櫻子監修 石田波郷・藤田湘子編『年代別 馬酔木巻頭句集』
近藤書店、1957（昭和32）年

個人蔵

「馬酔木三十年記念号」のために湘子がまとめた「巻頭句集」は、掲載の際に編集の都合で半分ほどにカットされた。この本は、それを「より完璧な形」でまとめたもの。湘子は「私にとってどちらも懐かしい仕事である」（『俳句の方法』）と述べている。



26

2 7 藤田湘子「愛されずして沖遠く泳ぐなり」年不詳

この句は、私的な事情により師に冷遇された2年間の苦しい時期に作られたもの。後に代表作として有名になり、小田原文学館にも句碑が建っている。



27

2 8 「俳句研究」12巻1号、1955（昭和30）年1月

個人蔵

「俳句研究」は、初め昭和9年3月に改造社から最初の俳句総合誌として創刊され、その後、休刊、復刊などを繰り返す、その後は富士見書房から発行された。本号は、口絵に秋櫻子の肖像、扉に波郷の句が掲載された他、山口誓子や飯田蛇笏、加藤楸邨などの俳人が文章を寄せている。

2 9 水原秋櫻子「藤田湘子宛はがき」1957（昭和32）年11月18日付

個人蔵

この年の11月15日、秋櫻子は長崎の毎日新聞社主催俳句大会に出席し、帰途、広島島の厳島などに回遊した。このはがきは長崎から出されたもので、出発する秋櫻子を見送った湘子への礼や、大会を終えて安堵したことなど、旅先での様子が記されている。



28

3 0 藤田湘子『途上』近藤書店、1955（昭和30）年

個人蔵

湘子の第一句集。序文を秋櫻子、跋文（あとがき）と選句を波郷が担当している。序文執筆を依頼した際に秋櫻子から「題名は二字がよいよ」と言われ、候補となる語を波郷がふたつ挙げ、その中から湘子自身が選んだタイトルが「途上」であった。

第3章 独立、後進の育成 鷹主宰

処女句集『途上』を刊行し、秋櫻子の媒酌^{はごころ}で結婚した湘子は、波郷の跡を継いで「馬酔木」編集長となります。これ以後、約10年間に渡り、湘子は同誌の編集長を務めます。同じころ、砂川基地拡張反対闘争に参加し、その経験をふまえた句を作ったり、国鉄本社広報部勤務となったりするなど、湘子の身辺ではいくつかの新しいことも起こっています。これら新たなできごとのうち最も大きなものに、「鷹」の創刊がありました。「鷹」は、湘子が創刊した新雑誌で、新人の育成、つまり「新人を育てて『馬酔木』へ送り出そう」という目的で発刊されたものでした。

やがて「馬酔木」編集長を辞任した湘子は、同誌の同人を辞退し、「鷹俳句会主宰」として新たなスタートを切ります。昭和58年には、毎日必ず十句以上作り、その全作品を「鷹」に発表するという「一日十句」を始めるなど、新たなことへの挑戦も行い続けました。

3 1 藤田湘子『雲の流域』金星堂、1962（昭和37）年

個人蔵

湘子の第二句集。昭和31年から同36年までの6年間の俳句を収めている。この時期の湘子は、砂川闘争に取材した俳句を発表するなど、当時興った社会性俳句（社会性を追求した俳句）を強く意識していたことが見てとれる。

3 2 石田波郷・藤田湘子『水原秋櫻子 俳句シリーズ 人と作品』

南雲堂桜楓社、1963（昭和38）年

波郷と湘子の共同執筆による秋櫻子についての研究書で、「作家研究篇」、「鑑賞篇」、「選句抄」、「紀行篇」からなる。湘子による「まえがき」（序文）には「その初学時代から現代に至る流れを追って、総括的に記述したもの」を旨とし、「秋櫻子の業績を忠実にたどるよう努力した」とある。この時期は湘子の「鷹」創刊直前の、「馬酔木」編集長時代にあたる。

3 3 「鷹」創刊号、1巻1号、1964（昭和39）年7月

砂川基地拡張反対闘争 立川米軍基地拡張計画に対する反対運動

立川基地が所在した砂川では、昭和30年5月以降、拡張予定地の測量をめぐり警官隊とたびたび衝突し、昭和31年10月14日には800人を超す負傷者が出、警官及び政府に批判が集中し、神崎清（評論家）、岡本太郎（美術家）、木下順二（映画監督）、山本安英（女優）、壺井栄（文学者）など多くの知識人がこの事件に関心を寄せ、反対意見を表明した。米軍及び政府は計画中止を決定。立川基地は昭和52年に全面返還された。



湘子は、秋櫻子より発行の許可を得て、昭和39年7月に「鷹」を創刊した。平成4年12月16日に行われた「対談 わが俳句を語る」(『藤田湘子』春陽堂、平成5年5月)によると、「若手だけを集めて「馬酔木」の独立当時のような新鮮な雰囲気養成し、親雑誌に活気を吹き込もうじゃないか」という発想」で作られた雑誌であった。

3 4 藤田湘子「湘子帖」年不詳

個人蔵

湘子は昭和58年2月より「一日十句」を開始した。これは、一日に必ず10句以上作り、すべてを「鷹」に掲載する試みで、「最初は何か月続くかわからなかった」(『藤田湘子』)が、結果的に昭和61年2月まで3年間続き、期間中の作句総数は一万千七百句におよんだ。この試みを始めた理由について湘子は、「もつと恥をかこうとか、洗いざらい自分をだしちゃえとか、そういう発想になってきたんですよ。それまでは算作だったから、鼻血が出るまで句を作って、俳句を作るのがいやになった、という経験がないんですよ。まだまだ十分に作りきれしていない、やれるかどうかがやってみよう、と始めた」と述べている。この句帖には、当時作られた俳句が書き留められている。

3 5 藤田湘子「四季帖」1988(昭和63)年〜2002(平成14)年

個人蔵

湘子が季節ごとに自選の俳句を記したもの。

3 6 藤田湘子「新20週俳句入門」立風書房、2000(平成12)年

20週、つまりおよそ五か月の間に、0から出発して、まずまずの俳句が作れるようになってもらおう(はじめに)という目的で書かれた入門書。「作句の必需品」、「季語のはたらき」など、一週ごとに異なるテーマで詳しく解説され、ロングセラーとなった。初版は昭和63年刊で、収録する俳句を新しくするなど改訂されたのが、この『新20週俳句入門』である。

3 7 藤田湘子「カルチャースクール教材用原稿」年不詳

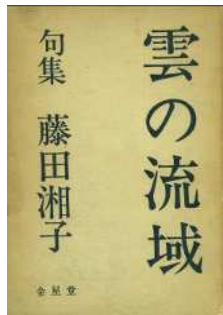
個人蔵

湘子は、NHKや朝日カルチャースクールなどで俳句の講師を務めていた。この原稿はスクールの教材用に書かれたもので、俳句の技巧や歴史などを、例となる句を挙げてわかりやすく説明している。

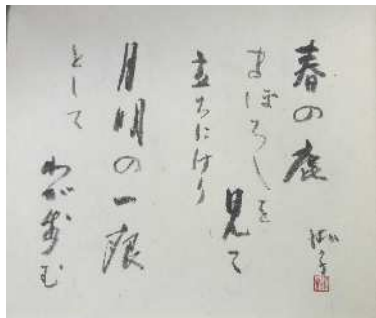
3 8 藤田湘子「神楽」入稿用原稿」1999(平成11)年頃

個人蔵

第十句集『神楽』(朝日新聞社、平成11年)入稿用に作られた原稿。湘子本人による朱の書き入れなどが見られる。



31



35



37

3 9 藤田湘子『神楽』朝日新聞社、1999（平成11）年

湘子の第十句集。平成4年から同10年までの7年間の句をおさめる。題名の由来は「十番目の切りのよい句集だから、自祝の意味をこめてめでたい題名にしようと思った」（『藤田湘子全句集』解題）ことによる。湘子はこの句集で第十五回詩歌文学館賞を受賞した。

4 0 藤田湘子「あめんば」「いくかぎり」「きさかた」年不詳
『神楽』に収録された俳句3句。

4 1 藤田湘子『てんてん』角川書店、2006（平成18）年

湘子の第十一句集。平成17年4月15日に逝去した湘子の没後ちょうど1年目に出された遺句集。

4 2 加藤楸邨「藤田湘子宛はがき」1986（昭和61）年1月27日付

個人蔵

楸邨の妻で、俳人の加藤知世子の葬儀に参列した湘子へ礼を述べ、健康に気をつけるようにと気遣いの言葉が記されている。

4 3 柳家小三治「藤田湘子宛はがき」1994（平成6）年11月7日付

個人蔵

この年10月に出版された湘子の著書『俳句の方法』の礼を述べたもの。嘶家・柳家小三治には俳句の趣味があるという。

4 4 水原秋櫻子「藤田湘子宛書簡」1948（昭和23）年11月17日付

個人蔵

湘子の書簡に対する返信で、新樹集（「馬酔木」の雑詠欄）の選句が終わわり、湘子は4句選ばれていて中位の成績であることや、馬酔木賞に決定したのだから来年は一層勉強してほしいことその他、俳句に対する姿勢を野球に例えて解説するなど、長い書簡ではないが、弟子である湘子に対する愛情や秋櫻子の姿勢を読み取ることができる。湘子はこの書簡を終生大切に保管した。

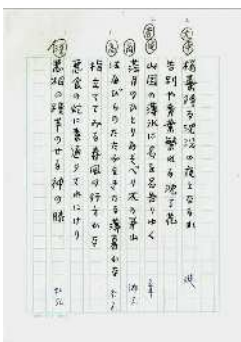
4 5 藤田湘子「月曜会選句用原稿」年不詳

個人蔵

昭和62年頃から、湘子は月に一度、席題即吟句会「月曜会」を行っていた。会場は、俳人・鈴木真砂女が経営する銀座の小料理店「卯波」で、平成11年夏からは鷹伴句会事務所会場を移して湘子の死の直前まで継続された。小田原で晩年を過ごした三橋敏雄も参加していた。

4 6 鷹伴句会編『藤田湘子全句集』角川書店、2009（平成21）年

「鷹」創刊45周年を記念して刊行された、湘子の全句集。別冊として、季語と初句で引くことが可能な「索引」が付されている。



社会性俳句

昭和30年代に俳壇に大きな論争を呼んだ運動で、俳句における社会性のあり方を追求した。この運動が活発になった背景には当時の社会情勢が関係している。戦後、米軍の基地拡張が急激に積極化され、若い多くの俳人がその問題に関心を持ち、「社会性俳句」を主唱したといわれる。この運動の隆盛にあわせるように、飯田龍太、石原八束、能村登四郎らの若手作家が台頭したが、湘子もそのうちの一人であった。

47 藤田湘子「湘子の俳句・小田原抄」(鷹・こゆるぎ)40号、平成17年7月) 昭和59年9月に小田原で創刊。湘子没後まもなく発行された本号では、湘子が小田原を詠んだ句を紹介する他、追悼文も掲載されている。

48 藤田湘子遺愛品「名刺」年不詳
湘子愛用の名刺。鷹俳句会用、名前だけ印刷されたものなど、数種類使用していた。

49 藤田湘子遺愛品「眼鏡」年不詳
湘子愛用の眼鏡。

50 藤田湘子「戦後俳句作家シリーズ21 藤田湘子句集」
海程社、1972(昭和47)年8月

個人蔵
小田原ゆかりの俳人である湘子の俳句を、小田原俳句協会の関係者らがまとめた。

謝辞

本展開催ならびに本冊子制作にあたり、次の個人・機関の方々より御協力を賜りました。

御芳名を記し、心より御礼申し上げます(五十音順、敬称略)。

石田 修大 県立神奈川近代文学館

尾崎 鮎雄 鷹俳句会

杉崎 せつ

藤田 かをり

藤田 和枝

水原 春郎

和田 明子

印刷・発行 平成27年3月
発行 小田原市立図書館
無断転載を禁じます。

資料翻刻

凡例

- 1 資料名冒頭の「は県立神奈川近代文学館蔵、は個人蔵であることを示し、番号は冊子中の資料番号を示す。
- 2 翻刻にあたり、常用漢字等に改めた箇所がある。
- 3 行替等は原資料に拠った。
- 4 「」は翻刻者による補足を示す。

24 石田波郷書簡（尾崎一雄宛） 1950（昭和25）年12月26日付

拝啓 厳寒の候 御左右 如何御う「か」
がひ申上ます

突然こんな御願申上げます 失礼の段
御ゆるし賜ハリ度存じます

私こと病床で別送申上ましたやうな
俳誌馬酔木の編輯をして生活してをり
ますが 今度三十週年に当りまして

日頃愛読してをります 先生に何とぞ
して御執筆仰げないかと このこと思ひ
きれず 重々失礼をもかへりみませず
御願いたした次第でございます

暢気眼鏡以来先生の御作八殆ど愛
読してをります 文学鑑賞の域をこえた
一ファンでございます

「ねむられぬ夜のために」の先生の文の中
に俳句が一句ありましたので 何かそれ
にすがりつくやうな気持ちで この御願を
してみようと心にきめました
まことにご迷惑と八存じますが 御気軽
に書いてみてやらうといふ御気持になられ
ましたら どんなに欣しいかと存じます
たゞ当方は小さな俳句雑誌のことゝて 大
きな文芸雑誌並の御礼八 とても出来
ませんが 三千円位の御礼ができると思ひ「ま
す 些少で御はづかしい次第ですが 御含
み頂けますと 忝く存じます
昨今八御病状もずつと御よろしい御様子
御よろこび申上ます

先八 御願のみ

草々不悉

十二月二十六日

石田波郷拝

尾崎 一雄 先生

尾崎 一雄様

大変ぶしつけでございますが 御気持
わるくございませんでしたら 御執筆仰
ぎたく切に御願申上ます 石田波郷



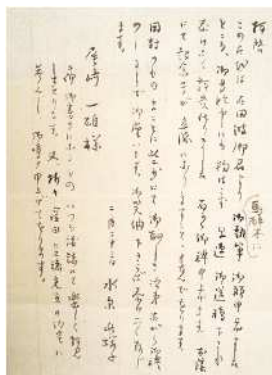
25 水原秋櫻子書簡（尾崎一雄宛） 1951（昭和26）年2月24日付
拝啓

このたびは 石田波郷君より 馬酔木に御執筆 御願ひ申上げましたところ、御多忙中にも拘はらず 早速 御送稿下され 忝けなく 拝受仕りました 厚く御礼申上げます。お蔭にて記念号が 立派になりましたこと、喜んでをります。同封のもの まことに些少にて 御恥しき次第ながら御礼のしるしで 御座います。御笑納下さらば忝けなく存じます。

二月二十三日 水原秋櫻子

尾崎 一雄様

二伸 御書きになるもの いつも諸誌にて楽しく拝見してをります。又、折々窪田空穂先生の御宅に 参上し、御噂さ申上げてをります。



25

35 藤田湘子「四季帖」まえがき 1988（昭和63）年〜2002（平成14）年

この年さる人の厚

志により 本帖を賜

びぬ その心つれしと

本年より四季自選

一句を誌して之にとど

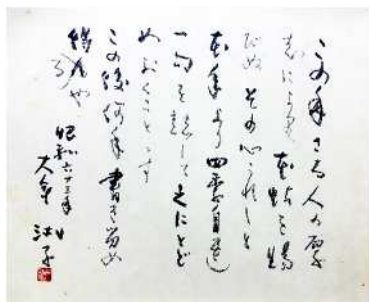
めおくことゝす

この後何年書き留め

得んるや

昭和六十三年

大年 湘子



35

44 水原秋櫻子「藤田湘子宛書簡」1948（昭和23）年11月17日付
拝復

御手紙昨朝拝受しました 小生珍らしく四五日風邪籠り

で、きのふから新樹集の選をはじめ、頑張つて 今終つたと

ころです。貴兄四句にて中位の成績。 今度は能村君と

共に 馬酔木賞に決定したのですから 来年は一層勉

強して下さい。俳句の作風を全然変へることは、人間を全

然変へることが 無理であると同じで、出来ないことゝ思ひます

野球でいへば、投球のコースをかへ、ベースをかへ、曲球の決

め球を工夫するのが大切です（貴兄の作風からいへば

曲球の決め球が適してゐませう。）

この曲球の決め球を持つには、非常に勉強し殊に

読書が必要で、いまのうちに あらゆる本を読むことが

大切です。

あまり書くと長くなるので、会つたときに話

ませう。

二十三日には拝眉出来ると思ひます。もし二十三日が

御都合わるければ、新人会へ御出かけの時に、一寸御立

寄り下さい。 先は御返事まで



44

十七日 秋櫻子

湘子様

近代俳句の系譜

江戸時代
明治前期

俳諧(俳諧連歌)

集団で作成する(座の文芸)
連歌から継承した伝統を重視

明治中期
(20年代後半)

俳句革新運動

座の文芸である「俳諧」から
個人で創作する文学である「俳句」へ
発句(連歌の冒頭に詠む句)を重視して、
単独の作品として取り上げる

秋声会

筑波会

日本派

正岡子規

事実吟詠と視覚重視による
写生を提唱

新傾向俳句

河東碧梧桐

伝統打破を強く継承
定型から外れた句も受容

高浜虚子

和歌以来の伝統も重視して
自然・人事の現象(花鳥諷詠)と
客観写生とを融合

飯田蛇笏

村上鬼城

「雲母」
「山鳩」

昭和初期

新興俳句運動

写生に客観だけでなく
主観との釣り合いを取る

山口誓子

写生に近代的な事物を導入し
作者による構成を重視

水原秋櫻子

写生に主観を強く採り入れ
抒情性を重視

人間探究派

写生の対象に人間性を
深く捉えようとする

加藤楸邨

「寒雷」

石田波郷

現実に基軸を置いた
人生詠

中村草田男

「万緑」

自由律俳句

定型を使わずに
言葉の内から汲み取った
リズムを重視

荻原井泉水

自由律で句作
季語を用いない(無季)

藤田湘子

「鷹」

藤田湘子略年譜

年号／年齢	できごと	俳句関係	世の中のできごと
大正 15	0		
昭和 7	6	「破魔弓」を「馬酔木」に改題、秋櫻子が主宰となる。山口青邨、秋櫻子・山口誓子・高野素十・阿波野青畝を四Sと称する。(昭3)	大正天皇崩御、昭和改元(大15)
昭和 16	15	「俳句研究」創刊。「ミヤコ・ホテル」論争起こる。(昭9)	五・一五事件(昭7)
昭和 17	16	高浜虚子渡仏。(昭11)	太平洋戦争開戦(昭16)
昭和 18	17	戦争俳句論争起こる。(昭12)	日本文学報国会結成(昭17)
昭和 20	19	三橋敏雄「戦争」57句。(昭13)	終戦(昭20)
昭和 21	20	京大俳句事件。日本俳句作家協会・新日本俳句協会設立。(昭15)	天皇人間宣言(昭21)
昭和 22	21	秋櫻子、野鳥俳句の新分野を拓く。(昭16)	日本国憲法施行(昭22)
昭和 23	22	新俳句人連盟結成。俳句作家懇話会結成。(昭21)	
昭和 24	23	波郷、「馬酔木」編集を担当。(昭25)	岩宿遺跡にて旧石器発見(昭24)
昭和 26	25	「馬酔木」に高原俳句・療養俳句が盛行。虚子、「ホトトギス」雑誌選者を高浜年尾に譲る。(昭26)	金閣寺全焼(昭25)
昭和 27	26	「俳句」創刊。(昭27)	日米安全保障条約調印(昭26)
昭和 28	27	虚子、文化勲章受章。(昭29)	カラーテレビ登場(昭30)
昭和 30	29		日本が国際連合に加盟(昭31)
昭和 31	30	虚子逝去。(昭34)	
昭和 32	31	「馬酔木」抒情の回復を問題とする。(昭35)	皇太子御成婚(昭34)
昭和 33	32	秋櫻子、日本芸術院賞受賞。(昭39)	東京オリンピック開催(昭39)
昭和 39	38	秋櫻子、芸術院会員に推される。(昭40)	川端康成 ノーベル文学賞受賞(昭43)
昭和 42	41	俳句文学館竣工。(昭51)	日本万国博覧会(大阪万博)開幕(昭45)
昭和 43	42	「ホトトギス」干号。(昭55)	あさま山荘事件(昭47)
昭和 44	44	秋櫻子逝去。(昭56)	石油ショック(昭48)
昭和 45	45		第二次ベビーブーム(昭50)
昭和 46	47		ロッキード事件(昭51)
昭和 48	49		日中平和友好条約調印(昭53)
昭和 50	49		
昭和 55	54		
昭和 56	55		
昭和 58	57		
昭和 61	60		
平成 4	66		
平成 6	68		
平成 11	73		
平成 14	76		
平成 17	79		